

秋！
 いよいよ秋だ！ 野に出よう。
 友と共に歌つて歩こう。
 空は高く、山はくつきりとうかぶ。
 秋の草花が野に咲いている。
 花は君達の来るのを待っているであろう。

頭の痛い問題だが

有名無実化した心得

記念祭に際して

世間はまだ十分に、學園の推移を知らないようである。三、四年も、或はひとひのになるゝ六、七年も昔の事が世間で通用している思つてみれば、まことに哀れな世間である。成程、生徒は五・六年も昔から居る人もある。先生方だつてそうだ。ところが、生徒はドンドンと新しく入つて来る。先生方は、これも同じようにドンドン入つて来た。その半面、高二・高三生になじみだつた先生方は學園を出ていかれた。これもドンドンと。そして次第に家庭的なカラーが無くなり、(以前のカラーが家庭的なものと呼べるならば)大學園となつてきた。

(成程、ホーム・ルームは強化され、クラスのままのは上手にいいものだ。

無くなる一方

まぎれに映画でも見に行くのかと
思っていた。するとその生徒、某
君の館に来ると、やにはにびよこ
んと御辞儀した、某君あわてふた
めいた。これまで下級生に、御辞
儀をされた事がなかったからであ
る。某君氣を取り戻し御辞儀した
しかし、前にはもうその生徒はい
なかった。ふりむくと、すでに二
三メートル後を歩いていた。弱い
者に、してやられた、という感じ
がして、気がむしやくしやくした。
するとこんどは高三の生徒がやつ
て来た。御辞儀をしようか、しよ
まいかと迷っているうちに、その
生徒はすでに某君の館に来た。そ
して、某君には脇目も振らず通り
去った。某君はチクシヨウと思つ
た、せつかく自分が御辞儀をして
やろうと思つているのにあの様は
なんだ、と腹を立てている間に、
またもう中学生がやつて来た。某
君その生徒が館にくると、恥かし
そつに御辞儀した。その生徒もあ
わてて御辞儀をした。ここで某君
考えた。洛星の生徒の礼儀は完全
であらうか。もちろん生徒は神父

朝礼十分前

時間厳守

「時間を厳守すれば他人に迷惑をかけないばかりでなく、時間を無駄につぶすことがなくなり生活を計画的に行うことができる。」これがよく知つてゐる様に生徒心得の一部である。我々の生活は時間によつて合理化されてゐるが、ともすれば時間に縛られ勝である此所で登校時を問題にしてみたいと思ふ。一日の学校生活は朝礼からであるが、これにギリギリでスベリコム者、補習部室や文庫で札をする者の何と多い事か同じ生徒心得に「朝礼十分前までに学校に到着していること」とあるのを知らない者はあるまい。所がこの項を実行してゐる三分の一にも足らない。なぜこんな多量なミセーフ型なのですか、それは毎日完全遅刻は約十分歩いたり走定になる。朝礼強への心構えを室内に望むわけだ。分節には時間の分際命に走つてい立派な心構えが所が、生徒の言十分でも早く行十分でもよいとい我々は毎日十分

は何所の生徒でしようかね
々には、一日の百四十四分

ののは全然作偽の
 ではないだつ。
 の者がスプリ
 なるつか、しかも
 二人位しかない
 間に四百人も
 始りから学校の
 たりしている
 によつて今日の勉
 けるのだ。さか
 出来た事だつ。
 分はつてであ
 のは隨處にい
 した。」「と、
 もじり眼を

進学にきくだけの余裕は無
 はない。」「種田なき反抗
 リコミにスリルを求めてい
 あろつか。約四百人もの生
 毎日スプリコミ運動をやら
 の理由は無いはずである。
 高三の諸君の中には、夜寝
 勉強強い鬱過すところもあ
 又それ位でなくてはならな
 ろう。又、石山、宇治、高
 日町、亀岡と通学範囲の広
 である、不慮の事故で遅刻
 ともあろう。しかし、電車
 等は、十分も早く家を出れ
 には影響ないはずである。
 桂から通学するところによ
 の諸君は気の毒だが。」「

急行普通とて約十分間隔で

である。これを忘れたくないものである。

止がたつたわっている。我々も小市	市民憲章にも『京都時間』の語	う(桂	阪急は	車し
いはず	所で先生にも一つお願いしたい	いはず	いはず	いはず
でスベ	朝礼の時、目によつては校長先生	でスベ	でスベ	でスベ
るので	が、遅刻者の為を思われてか、な	るので	るので	るので
徒には	かなかお出にならず、ボサツと立	徒には	徒には	徒には
かす程	つたままで待つている事がある。ど	かす程	かす程	かす程
勿論、	うか定刻にはお出になつて載きた	勿論、	勿論、	勿論、
く迄の	いものである。	く迄の	く迄の	く迄の
う。	時間厳守は確かに努力を要する	う。	う。	う。
いであ	しかし、時間の奴隷にはなりた	いであ	いであ	いであ
い、向	とによつて余裕のある生活を送り	い、向	い、向	い、向
い、向	、無駄をなくし、掲げ正しい行動	い、向	い、向	い、向
い、向	をとるならば、自ずから洛星の生	い、向	い、向	い、向
の遅延	徒としてのプライドが出来、更に	の遅延	の遅延	の遅延
に遅刻	人間として完成してゆくのではな	に遅刻	に遅刻	に遅刻
る例え	かろうか。	る例え	る例え	る例え

学校側
が許可

つ非常
る。生
である
が、こ
もらわ
為に、
ければ
よくと
えてく
急に
つた時
側は言
い場合
である
どうか
の為に
しいと
徒も守



「すね……」突如彼の顔面に血の気が
見えた教室は一瞬静まり返った、
落雷である。正木二三雄氏の顔面
は真つ赤である。「コラー！何シ

トルカ!!」：真つ赤な顔が、一寸と元に戻つて行く。台風、過敷室内に秋風が吹く、以上の記述は、二、三年前迄の話であるが、今は如何? エピソードは数々あるが、それは、さては置正木先生の勤務評定書を公開しよう、仇名は「ヤボン!」(意味深長) 性格は明朗だが右記の如く授業中落雷の由、その話す所の事は難解であり、少々大げさたとの説がある、一例を挙げるに常に六法全書を持ち歩き、難しい解釈を長々と言ひ立てられ、生徒諸君は解つたのか解らないのか筆者には分らないが、真妙な顔をして聞いて居る、かと思ふと学生時代の話になると身振よく「エイッ」と飛び移つて難を避ける。……

……之は教室外で話を聞いたものである、いやは猿飛佐助並であるが、真偽の程は読者の想像にお任せする。音楽ではベートベンの「運命が何たとかかんたか言つておられた。その他エピソードは諸々であるから御本人から聞かれるがよろう。正直に言つて彼に対する批評に「種類ある、A君曰く「あ面白ひ事は面白いけれど何の知らんぞと難しいことを言ひすぎる。ちよつと……」之は教室だけで彼を見て居る生徒の声。つまり彼が大げさだと言ふのである、それに対してB君曰く「そやけど一寸断つて面白かり之が正木三雄氏である。

民(他
徒え)
則正し
心得を
なかる
乙
特に
の項二
る生徒
映画名
入し(一
押して
つける
載する
現状
はわか

高校修学旅行

色々見て歩記

高二は七月の十八日から九月十日で北海道へ修学旅行に行つて来た。そこで山田、樋口、伊ヶ崎の三人に旅行中に感じた事、或いは旅行の様子等を書いて貰つた

写真は中川、岡本両君提供

北海道一部旅行記

山田 恒太郎

北海道第一夜を函館からの車中から九泊十日で北海道へ修学旅行に行つて来た。そこで山田、樋口、伊ヶ崎の三人に旅行中に感じた事、或いは旅行の様子等を書いて貰つた

修学旅行の楽しみ

樋口 釣士

青森三十三時間、全くグツとグツと。いよいよ三十三時間の旅が始まる。いよいよ三十三時間の旅が始まる。いよいよ三十三時間の旅が始まる。

おちいセ

前田先生の巻

部屋六畳一間。寒に見事なものである。しかしその温度は記者二人が入つた瞬間に汗をふかすほど暖かくなつた。



自分から「コンナコトアルカイヤ、次の間は「ボク」の珍談か、いな、そんな新聞にはあらへんぞ」といふ。何にしろ居心地のいい部屋だ。(諸君行くといふ)

白老アイヌ部落を訪ねて

伊ヶ崎 安孝

アイヌは現在二五戸、五六〇人ばかり生活している。昔、又昔、アイヌといふ者が一旅を率いて来た。アイヌといふ者が一旅を率いて来た。アイヌといふ者が一旅を率いて来た。



最初案内されたのは、エカシマツコという首長の住居である。そこでは首長が我々旅行者にアイヌ独特の生活様式を、日曜に教へた。

編集後記

▼本号は最初の発行予定日より一週間遅れた。▼今度高知から清水、川崎の両君が新しく同僚となられた。▼本号は一面を時野谷、二面を大岩、加太、清水、川崎、三面を五條、高谷、藤沢、四面を河村が担当した。